2016.9.25　年間第２６主日

金持ちの門前に貧しい人はいる、金持ちが貧しい人をつくる

ルカによる福音書　16:19-31

（そのとき、イエスはファリサイ派の人々に言われた）

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそば（アブラハムのふところ）に連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府（よみ＝地獄）でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』アブラハムは言った。『もし、

モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

説教

きょうの福音は意味の解説は必要ないぐらいに明確です。金持ちがいて、毎日贅沢三昧に暮らしていた。その門前にラザロという「できものだらけの貧しい人」がいて誰からも見向きもされなかった。ラザロは死に、金持ちも死んだ。そしてラザロは天国に行き、金持ちは地獄に落ちた。
後半は金持ちの懇願で３つほどの問答が記録されています。そちらのほうはなかなか興味深い話ではあるのですが、きょうは前半部分について話をしようと思います。

いろいろな読み方、解釈のできる福音で、どう解釈するかで説教の内容もいろいろ変わります。３年前の福音説教でわたしはラザロ＝イエスという見方で解釈してみるとどうだろう？という話をしました。きょうはその視点ではなく「天国と地獄」という見方でこの福音を読んでみます。

宗教は「人は死んだらどうなるのか、どこへ行くのか」という質問に真正面から答えなければいけない、と私は考えています。キリスト教ではこう考えています、という形で答えなければなあ、と常々思っています。きょうの福音はその答えが明確に書いてあります。
貧乏人は天国に行き、金持ちは地獄に落ちる。
身もふたもない言い方ですが、はっきり書いてあります。

天国と地獄というけれど、どこにあるんだ、行ったことがあるのか、証拠がない限りそんなことは信用できない、という見方をする人もいるでしょう。天国と地獄は信じるけれど、金持ちは地獄、貧乏人は天国という単純な割り

切り方は納得できないという人もいるでしょう。

人間はどこまで知ることができるのだろうか、ということを考えることがこの「天国・地獄」問題の解決のヒントになるとわたしは考えています。わたしのいまの結論は、人間には知ることができることもあれば、知ることができない（人には知りえない）こともある、です。天国はあるのか、地獄があるのかという問いは、知ることができない、知りえない事柄だと考えています。
では、信じているのか、信じていないのかとさらに問われれば、信じている、という答えになります。つまりこの手の問題に関しては「あるのか、ないのか」という問いかけは「信じるのか、信じないのか」という問題にわたしの中では変わってしまいます。

福音に戻ると、前半部分は信じるのだけれど、後半部分はなんかとってつけたような話だなあ、と感じるのでじつのところ私は信じてはいません。
むずかしい話は抜きにして、説明します。（わたしの感想です）
天国にはいきたい、でも地獄に落ちるかもしれない。地獄のことをあれこれ説明されてもあまり聞きたくないし、信じたくない。実際に自分が地獄に落とされればわかることだし、生きているいま知りたいとは思わない、というところがわたしの実感です。それはあるていどわたしが満たされているからかもしれません。実際にいまの状況が「生き地獄」だと感じている方もいるでしょう。福音では、ラザロは死んで「アブラハムのふところ」にいる、とはっきりといいます。いまが地獄のようならば、死んだら天国にいける、これはおおきな慰めになると思います。
でも地獄にはおちたくないし、そのためにはどうすればいいのか。
きょうの福音では貧乏人は天国いき、金持ちは地獄行き、です。しかし、先

週の福音では「不正な管理人」は乞食にはなりたくないなあ（ラザロみたいになるのは嫌だ）と考え借金棒引きをおこない、主人（神）にほめられました。たぶん管理人はいまの職を失ったあと、恩を売った相手に雇われて、収入は経るかもしれませんが乞食にはならずに済んだのでしょう。その上、神から褒めてもらっていますから、地獄にはいかずにすんだことでしょう。これは、かならずしも乞食にならなくても天国にはいける道があるのだということじゃないでしょうか。

いまが「生き地獄」を生きている人がいます。死んだら天国にいけますよ、というだけで慰めになるか、というとそれは嘘です。さきほどあまり信じていないんだといいましたが、きょうの福音の後半の教訓は金持ちは貧乏人に手を差し伸べなければだめだ、自分の贅沢にうつつを抜かすのではなく、門前にいるラザロに親切にしろ、です。この教訓をすべての人がいま実践すれば、この世の地獄的な状況は変わります。この世が救われます。きょうこの福音を聞く人々がこの福音のことばの力によって変わりますように。そして私たちも聴くだけでなく、みことばを信じて、行う人に変えてください。